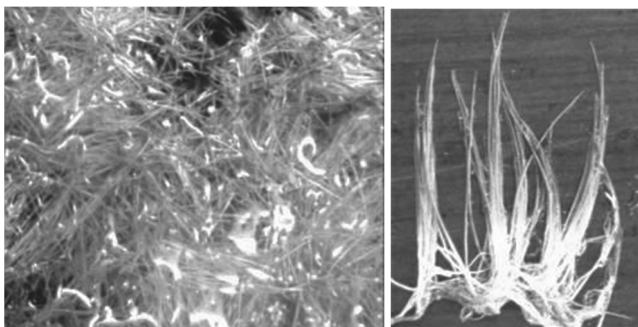


(6) マツバイ

マツバイは低温の浅水、ヒタヒタ水で管理している水田を好み、早期栽培で発生しやすい雑草です。絨毯状に繁茂し、松の葉状の葉が特徴です。



表Ⅲ-21 マツバイ抑制のための対策

写真Ⅲ-35 マツバイ

対策	方法
越冬芽の繁殖防止、稲わら分を進める	早期の秋起し
初期除草	浅水代かき
水稻生育の促進	圃場均平化、畦塗り、適度な代かき
生物活性を高める	有機物田面施用
越冬芽が地表に出て、繁殖元となる	中耕除草を行う(田植え20日以降)
マツバイの生育抑制	水深8cm以上の深水管理

7) 生育不良時の対応策

分けつ期はとくに葉の生育具合の善し悪しの観察が重要です。生育不良がみられれば表Ⅲ-22を参考に対策を施します。

表Ⅲ-22 生育診断と対応策

症状	原因	対策
・葉先の向きが垂れ下がっている	・窒素過多	・中干しをして根に酸素供給
・葉身の色が濃く、葉しょうの色が薄い	・ガス害	・中耕除草をする
・葉色が葉色板で2以下	・根痛み・窒素不足	・中干し後、生育を見て追肥

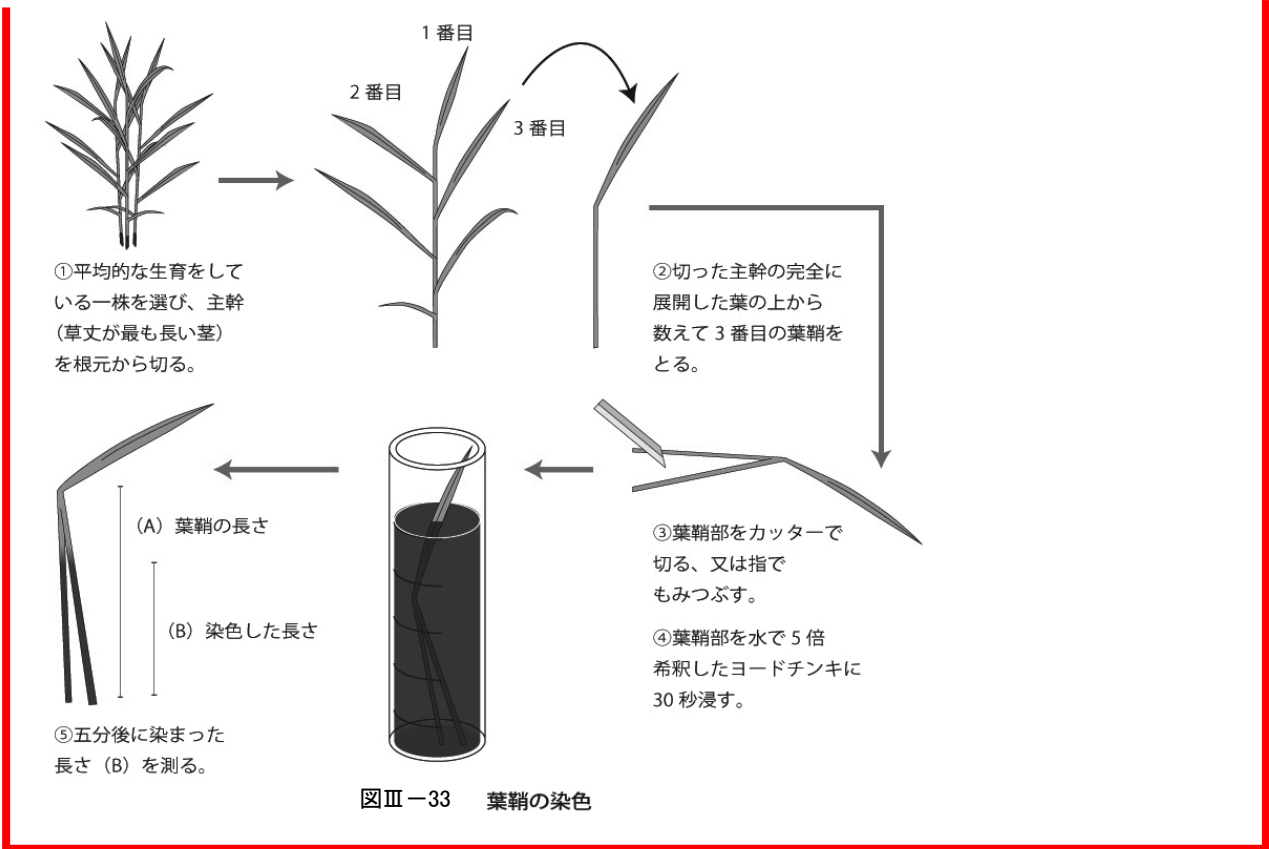
穂肥の判断

出穂 35～30 日前に目標茎数を確保出来ているかを確認します。

- ・確保出来ていない場合は生育不良が考えられるので表Ⅲ-22を参照して原因を推測し、対策を施します。
- ・確保出来ている場合は稲体の炭水化物蓄積状態を以下の図Ⅲ-33の方法で調べて、表Ⅲ-23を目安に必要なら穂肥を施用します。

表Ⅲ-23 葉鞘の染色率と穂肥の窒素施用量の目安

葉鞘の染色率 = $B \div A \times 100$	窒素施肥
50 以上	窒素成分で 1～2kg/10a 施用すると増収が期待できる
30～50 未満	慣行より少なめ、または追肥なし
30 未満	追肥しない



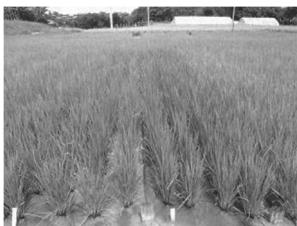
8) 畦管理

畦畔の強度は畦草の根によって保たれています。しかし、畦草を放任にするとイネ科雑草がカメムシのすみかになり、地下部はモグラによって畦が崩れ、さらに水田景観も損なわれます。

カメムシは水稻出穂以前に畦畔のイネ科雑草にまず着生するので日頃から畦草刈りすることでカメムシの食害は軽減されます。しかし、水稻の出穂直前と直後に畦草刈りをするとう草のカメムシは水稻の穂に移り、吸汁します。出穂1週間前を切ったら畦草刈りを止め、出穂後25日過ぎると米粒が硬くなるので畦草刈りを再開します(写真Ⅲ-36)。

畦草を地際すれすれまで低く刈るとイネ科雑草ばかりが優占しやすくなり、結果的にカメムシの温床になることもあります。畦草の刈り高は地際から5cmくらい残すと畦畔の草種が多様になり、イネ科雑草がほぼよく抑草されます。また刈り刃による飛び石の事故対策にもなります。

出穂1週間前
畦草刈りを休止



出穂期



出穂後25日以降
穂が黄金色になりかけたら
草刈り再開



写真Ⅲ-36 出穂前後のイネの様子